

ポジティブ・イリュージョン研究の展望

臨床心理学コース 藪 垣 将

A review of positive illusions studies

Sho YABUGAKI

Taylor & Brown (1988) review articles and show positively biased perception as a normal human thought, and researches of positive illusions are started from this review. This study reviews previous research on positive illusions in both overseas and Japan, and then explores how the definition of positive illusions has been changed and how the methodology of measurement of positive illusions has been developed. Also, the author selectively reviews some of the significant studies that have been made toward understanding the effects of positive illusions with the purpose of showing main issues in previous researches. As future tasks, the author proposes that collecting hierarchical data and using of hierarchical analysis such as hierarchical linear modeling or pairwise approach, more contrivance on measurement of positive illusions, more qualitative researches, and more longitudinal studies are needed.

目 次

- 1 ポジティブ・イリュージョンとは
 - A 精神的健康観
- 2 研究の展望
 - A 定義
 - B 測定方法
 - C 研究のテーマ
 - D 認知領域
- 3 今後の課題
 - A 階層的データと階層的分析法
 - B 測定方法
 - C 質的研究法
 - D 縦断的研究
 - E まとめ

1. ポジティブ・イリュージョンとは

心理学研究において、認知は精神的健康の理解を深める際の鍵概念である。肯定的に偏った認知が精神的健康につながるという考え方はポジティブ・イリュージョン (positive illusions, 以下PIとする) と呼ばれ、これまで多くの研究が行われてきた。PI研究は Taylor & Brown (1988) に端を発するが、研究が積み重ねられるに伴い、PIの研究方法——定義や認知の領域、測定方法など——は広がりを見せている。そこで、本研究はPI研究の展望を行い整理することを

通じて、先行研究の問題点と今後の課題を挙げることを目的とする。

A. 精神的健康観

従来、臨床心理学などの臨床領域においては、自己概念やその者が置かれている状況および自身の将来に対する正確な認知が精神的健康につながる (Johada, 1953) と考えられてきた。これに対して、Taylor & Brown (1988) は先行研究の概観を通じて、正常で健康な者は「1. 非現実的に肯定的な自己概念を有し、2. 周囲の環境を統制する能力があると信じ、3. 自身の将来は平均的な者に比べてより良いものであると考える」という特徴を有することを見出し、肯定的に偏った認知が精神的健康につながるという精神的健康観を提唱した。これら2つの精神的健康観に対し、Baumeister (1989) は「1. 肯定的な認知は適応的にも不適応的にも機能し、2. これらは認知が偏っている程度によって決定され、3. 『認知の偏りの程度が最適である限界』が存在する」という最適限界理論 optimal margin theory を提唱した。以降、これら3つの精神的健康観について、それぞれを支持する実証的研究が示されており、現在に至るまで、認知と精神的健康の関係についての統一的な見解は得られていない。

2. 研究の展望

A. 定義

当初、PIは自己高揚バイアスに基づいた認知の偏りと定義された (Taylor & Brown, 1988)。イリュージョンという用語は、認知の誤り (error) や偏り (bias) と区別するために用いられている。これらの用語との違いは、イリュージョンは認知の誤りや偏りに比べて概念的に広いこと、歪んでいる認知は一時的なものではなく、ある程度の時間的幅において継続する性質があることの2点である。なお、イリュージョンには肯定的なものだけでなく、否定的なものも存在することも明らかにされてきた (e.g. 外山・桜井, 2000)。これらはネガティブ・イリュージョンと呼ばれる (以降、本稿ではこれらをまとめてPIとして表記する)。

さて、PI研究が進むにつれて、後述の通り、PIの生起は自己認知のみならず、他者認知、親密な他者との関係への認知である関係認知においても認められることが明らかとなっている。また、認知が歪む背景にある要因として、高揚動機以外の要因の関与を示す研究 (e.g. 工藤, 2004) も見られるようになった。実際の研究においても、PIの定義として、背景にある高揚動機の存在の有無を問わないものが少なからず存在している。以上をふまえると、「肯定的に歪んだ認知」と広く定義することで、包括的にPI現象を捉えることが可能になる。

B. 測定方法

従来のPIの測定方法は、大きく分けて3種類ある。PI研究の初期においては、PIの測定方法として、平均点以上効果をもってPIとする「規範的モデル (normative model)」による方法が採られていた。平均点以上効果は、自身について自身の所属集団内での相対的地位を尋ねると、その回答の平均が理論上の平均値を上回る現象である。平均点以上効果は、PIが生起しているものとして解釈されてきた。このことは、PIは集団レベルで生起する現象として捉えられてきたことを意味する。規範的モデルへの批判としては、自己認知に対する客観的な基準が存在しないことや、平均点以上効果がPIとは異なる要因によって生起することが挙げられる。後者について、工藤 (2004) は、平均点以上効果の生起には評定項目の獲得容易性の効果が影響を持つこと、このことは能力だけでなく特性の評定においても認められることなどを示した。

すなわち、「そのような特性を備えることは容易である」というような側面について評定を行った場合、平均点以上効果が生起することが示された。

そこで、規範モデルに代わるPIの測定方法として、測定項目に対する自己評定と他者評定を比較する「社会的合意 (social consensus)」を用いた方法が採用されるようになった。社会的合意モデルへの批判としては、他者評定が自己評定よりも正確であるということが保証されない点が挙げられる。ここでは、規範的モデルと同様に、客観的な評定基準が存在しないことが問題として残されている。

これらの問題意識を受けて、PIの生起程度を客観的に評価出来る方法として、GPAなどの客観的指標を用いる「操作的基準 (operational criteria)」を用いた方法を採る研究が見られるようになった。ただし、限界として、操作的基準となりうるような客観的指標が限られている点が挙げられる。そのため、PI研究の内容によっては操作的基準を用いることが出来ず、他の測定方法を採用する必要がある。

これら3つの測定方法は、それぞれ長所と短所を有しているために、トレード・オフの関係にある。したがって、いずれの測定方法が優れているかということではなく、それぞれの測定方法を状況に応じて組み合わせたり使い分けたりすることが有用である。

例えば、外山 (2006) は、小学生の社会的コンピテンスのPIについて検討を行っている。この研究では、本人による社会的コンピテンスの自己評定と教師評定による社会的コンピテンスの差をPIとする社会的合意の測定方法が用いられている。学校臨床への示唆を得るための知見としてこの研究を捉えた場合に、教員が生徒をどのように捉えているかということは重要な意味を有することから、教師評定を用いた社会的合意によるPIの測定によって得られた知見は、臨床現場における教員への介入・援助において有用であるだろう。

このように、研究の目的や内容、文脈、知見をどのようなことへ応用するかといった事柄は、PIの測定方法を考える上で重要な要因となる。

C. 研究のテーマ

それでは、先行研究においては、どのようなことが明らかにされてきたのだろうか。本項では、PI研究について選択的に概観することで、近年のPI研究における主要なテーマをまとめる。

方法

概観の対象となる論文は、論文データベース PsychInfo および CiNii を用いて抽出した。検索は2010年4月に行った。その際に用いた検索語は、"Positive Illusions" および「ポジティブ・イリュージョン」であった。検索条件として、1. 査読付きの論文であること、2. 英語もしくは日本語で記されていることとした。以上の手続きを経て抽出された93篇の論文を概観対象として、2000年以降の論文を中心に内容ごとに整理した。

心理・発達の要因

先行研究の知見からは、パーソナリティや動機などの心理学的要因や発達の要因とPIの生起との関連が示されている。Robins & Beer (2001) は、PIは自己愛傾向や自我関与、自己奉仕の原因帰属、肯定的情動と関連していることを示した。他にも、自己実現がPIと関連すること (Boyd-Wilson, Walkey, & McClure, 2002) や、制御資源 (regulatory resource) がPIの生起に必要なこと (Fischer, Greitemeyer, & Frey, 2007)、権力を持つ経験 (experience of power) が統制感に関するPIにつながる (Fast, Gruenfeld, Sivanathan, & Galinsky, 2009) など、PIの生起に関連する様々な心理学的要因が示されている。

PIを生起させる動機を検討した研究は、次のようなものがある。Gramzow, Elliott, Asher, & McGregor (2003) は、大学生の学業的パフォーマンスについて、過剰に肯定的な自己評価は自己高揚動機や接近動機を反映するが、しばしば自己防衛動機や回避動機を反映していることを示した。さらに、自己評価の歪みの水準が学業的パフォーマンスの結果に関連するのではなく、それらの背後にある動機が結果に関連していることを示した。EI-Alayli & Gabriel (2007) は、自己の特性の変容に関する統制感について検討し、イリュージョンの背後には自己成長動機ではなく自己承認 (self-validation) 動機が存在することを示唆した。

発達の要因としては、ADHDとPIの関連が検討されている。Hoza, Pelham Jr., Dubbs, Owens, & Pillow (2002) は、ADHDの子どもは統制群に比べ、学力や社会的受容、行動統制において自身を過大評価することを見出した。さらに、Evangelista, Owens, Golden, & Pelham Jr. (2008) は、子どもの自己認知を教師による評定と比較し、ADHDの子どもはそうでない子どもよりも自己を過大評価していることを見出した。

社会・文化的要因

他者との相互作用や文化的背景が、PIの生起に影響する要因として示されている。

社会的な相互作用に注目した研究として、Anderson, Srivastava, Beer, Spataro, & Chatman (2006) は、地位に関する認知は極めて正確であることや、地位における高揚的な自己認知は低い社会的受容と関連することを示した。Anderson, Ames, & Gosling (2008) は同様の知見を提出し、さらに個人は自身の地位を正確に認知する傾向があることや、地位についてイリュージョンを有する者はグループのプロセスを妨げるものとしてみなされるため社会的に制裁されることを示した。また Bromgard, Trafimow, & Bromgard (2006) は、私的自己、集団的自己、関係自己の3水準の実験条件を設定し、調査協力者に対しいずれかのプライミングを行った上で自己陳述を行わせ、内容の分析を行った。その結果、集団的自己あるいは関係自己がプライムされた時に、自己陳述の内容はもっとも肯定的なものとなった。このことから、PIは他者との関係の文脈において強調される可能性が示唆された。

次に、文化的要因を指摘した研究として、異なる文化圏の調査協力者を比較した研究がある。Endo, Heine, & Lehman (2000) は、日本人、アジア系カナダ人、及びヨーロッパ系カナダ人を対象とした調査研究を行った。その結果、いずれの対象者も自身の関係を肯定的に捉えている点は共通していた。さらに、1. 関係奉仕バイアスは自尊心や自己奉仕バイアスとは相関しないこと、2. 日本人のみにおいて、関係奉仕バイアスは個人が自身よりもパートナーをより肯定的に捉える程度に対応していることを示した。Fowers, Fisiloglu, & Procacci (2008) は、アメリカ人夫婦、血族結婚ではないトルコ人夫婦、血族結婚をしているトルコ人夫婦の3群を対象とした調査研究を行った。研究の結果、これら3群は否定的側面において一般的他者に対する評定の様相が異なることが示され、PIの生起は文化によって調整されていることが示唆された。

精神的健康・適応

PIと養育行動の関連を検討した研究として、Mazur (2006) は、否定的な認知の誤り及びPIが、養育場面における日常的な困難の頻度や程度と相関関係にあることを示した。Cohen & Fowers (2004) は、子どもに対するPIと、養育経験についての主観的報告におけるPIについて、実親および継親を比較した。そ

の結果、いずれもPIを示したこと、実親の方がよりPIを示したこと、親役割への適応の程度がPIに関係していること、親の養育満足度を構成する最も重要な要因は親子関係の非現実的に肯定的な認知であることなどを見出した。

PIと精神的健康の関連を検討した研究には、次のものがある。Ransom, Sheldon, & Jacobson (2008) は、ガン患者を対象とした研究を行った。その結果、疾患の結果として経験される人格的成長は、縦断的に自己を比較した結果としてのPIおよび生物的評価過程 (Organismic valuing process) によるものであり、これらは相互に独立していることを示した。Gana, Alaphilippe, & Bailly (2004) は、退職者857名を対象に調査研究を行い、若さに関するPIを有している者は余暇に満足し、高い自尊心を有し、よりよく自身の健康を知覚し、退屈していないことが示された。

PIと社会適応の関係を扱った研究は、次のようなものがある。Brendgen, Vitaro, Turgeon, Poulin, & Wanner (2004) は、級友や友人との社会的な関係に関するPIを有することは、仲間評定による社会的望ましさを増加させ、友人との二者関係の安定性を促進させることを見出した。さらに、仲間集団における社会的コンピテンスのPIや友人関係の質に関するPIは抑うつ気分を低減させることを示した。また、仲間集団における社会的コンピテンスについて、極端な過大・過小推定は攻撃性と関連していることを示した。外山 (2008) は、社会的コンピテンスにおけるPIを備え持つ児童はそうでない児童よりも、自己評定による精神的健康、適応が高いことを示した。

生物学的要因として、Taylor, Lerner, Sherman, Sage, & McDowell (2003) は、高い自己高揚動機を有する者は、ストレスに対する心反応が低いこと、また心反応の回復が早いこと、コルチゾールの水準が低いことを見出した。

問題行動・不適応

PIと問題行動の関連を検討した研究は、問題対処行動にPIは不要であるとするものや、PIを有していることが問題行動へとつながっている可能性を示したものがある。Boyd-Wilson, Walkey, McClure, & Green (2000) は、自己の特性におけるPIと問題焦点化対処行動に関連が見られなかったことから、問題に上手く対処するためには物事に対して肯定的である必要があるが、PIは必要ないことを示唆した。Unger, Molina, & Teran (2000) は、十代での出産が肯定的な結果につながると考えていることが性的交

渉リスクの増加に関連することを示し、十代の妊娠を予防するための戦略として、十代での出産についてのPIを否定することなどを指摘した。Dhami, Mandel, Loewenstein, & Avton (2006) は、囚人が自身の再犯可能性について、統計データに比べ遙かに楽観的であることを示した。Schlehofer, Thompson, Ting, Ostermann, Nierman, & Skenderian (2009) は、自身の運転能力に関するPIを有することが運転中の携帯電話使用につながることを示した。

もう一つ、PIの影響を考慮する際に重要となる要因として、時間的要因がある。Colvin, Block, & Funder (1995) はPIを有することについて、長期的にみればPIを有する者は孤立してしまい、また彼ら自身の自己愛が強化されてしまう可能性があることを指摘した。彼らの指摘を実証した研究として、次のものがある。Robins & Beer (2001) は、PIは自尊心の低下およびwell-beingの低減と関連すること、PIは高い学力を予測しないことを示し、自己高揚は短期的には適応的だが、長期的には適応的ではないことを示唆した。外山 (2006) は、社会的コンピテンスにおけるPIは、時間が経つにつれて、攻撃的な児童に対してさらなる攻撃行動の促進につながるということを示した。

不適応に関する研究として、外山 (2008) は、社会的コンピテンスにおけるPIを備え持つ児童はそうでない児童よりも、教師やクラスメイトから攻撃性が高いとみなされ、クラスメイトからは受容されていないことを示した。

親密な他者との関係についてのPI

親密な他者との二者関係についての認知が研究者の関心を集めている。さらに、極めて少数ではあるが、家族のような上位システムに対する認知を取り上げる研究も見られる。なお、関係認知には大きく分けて、関係そのものの性質を問うもの (e.g. 私たちの夫婦は～である) と、特定の関係にあるパートナーの性質を問うもの (e.g. 私の配偶者は～である) の2つがあるが、ここではこれらをまとめて関係認知とする。

夫婦関係認知を検討している研究は、Fowersらによる一連の研究 (e.g. Fowers, 1996) と、Miller, Niehuis, & Huston (2006), Luo & Snider (2009) がある。Fowers, Lyons, & Montel (1996) は、夫婦関係についてのPIは個人の楽観性や悲観性、および社会的望ましさよりも結婚生活の質と強く関連することを見出した。Fowers, Lyons, Montel, & Shaked (2001) は、夫婦関係についてのPIは結婚満

足度および持続期間によるものかどうかを検討し、PIはこれらに依存しないことが見出された。Fowers, Veingrad, & Dominics (2002) は婚約しているカップルを対象に面接を行い、個人はパートナーに対する肯定的な認知を様々なやり方で維持していることを見出した。Miller, Niehuis, & Huston (2006) は、夫婦関係の理想化による結果について検討するため、新婚夫婦168組を対象に、日記および質問紙データを用いて13年にわたる縦断的研究を行った。その結果、配偶者を理想化しているの方がそうでない者よりも新婚時に愛し合っていたこと、新婚時に配偶者を理想化するとその後愛情の低下が少ないことが示された。Luo & Snider (2009) は新婚夫婦を対象に研究を行い、夫婦関係認知の正確さやPI、および夫婦の類似性についての認知の偏りは、それぞれ独立して夫婦関係満足度に寄与していることを示した。さらに、夫婦関係認知の正確さおよび夫婦の類似性についての認知の偏りはパートナーの満足度に寄与するが、PIでは見られなかった。

恋人関係認知を取り上げた研究は次のものがある。外山 (2002) は、恋人関係および友人関係において、ポジティブ・イリュージョンが見られること、また個人は自身よりもパートナーをより肯定的に評価することを示した。Swami (2009) は、恋人を自身よりも魅力的であると認知する傾向である「love-is-blind bias」を同性愛カップルを対象に検討し、多くの身体的魅力に関する質問項目において、パートナーを肯定的に評定する、頑健なバイアスが見られることを示した。Barelds-Dijkstra, & Barelds (2008) はカップルを対象に、身体的魅力についてのPIを検討した。その結果、個人はパートナーの身体的魅力についてのPIを有していることが示された。Barelds & Dijkstra (2009) では、同様の結果に加えて、パートナーの身体的魅力についてのPIと夫婦関係の質の関連が示された。

その他、Conley, Roesch, Peplau, & Gold (2009) は、夫婦や同性愛・異性愛カップルを対象とした研究から、パートナーの自身への評価よりも好ましくパートナーを評価している際に、親密な関係はより満足するものとなることを見出した。

まとめ

PIの生起には生物学的要因、心理学的要因、社会的文化的要因と様々な次元の要因が影響していることが示された。

次に、適応と不適応に関する研究からは得られた知

見は、次のようにまとめることが出来るだろう。PIと精神的健康・適応に関する研究からは、生物学的水準における適応、well-beingの増加や満足度の増加、関係役割適応、社会適応というように、PIを有することは様々なシステムの水準において精神的健康の増加や適応へつながることが示された。

一方で、PIと問題行動・不適応に関する研究からは、特定の文脈におけるPIは問題行動へとつながる危険性があること、およびPIによって維持されている問題行動が不適応へとつながっている可能性が示唆された。これらの知見は、PIを有していることのメリットとデメリットについて、文脈を踏まえて理解する必要性を示している。すなわち、PIが適応的であるかどうかについては一元的に論じることは不可能であり、どういう状況においてどのようなPIを有すると適応的・不適応的なのかというように理解する必要がある。

最後に、親密な他者との関係についてのPIの研究からは、PIと関係の質の連関が示された。ただし、関係認知を取り上げている研究は少なく、これから研究が蓄積される必要がある。

D. 認知領域

これまで概観したように、非現実的な自己概念、環境統制力および楽観性を扱ってきたPI研究は、やがて焦点となる自己認知の領域を拡大していった。その内容は、学業のパフォーマンス (Gramzow, et al., 2003)、自己の特性の変容に関する統制感 (EI-Alaylli & Gabriel, 2007)、年齢 (Gana, et al., 2004)、再犯可能性 (Dhami, et al., 2006) など、多岐にわたっている。

さらにPI研究は、自己認知のみならず、他者に対する認知である他者認知や、他者との関係についての認知である関係認知に焦点を当ててきた。とりわけ、親密な他者との関係についての認知が、研究者の関心を集めている。PI研究において取り上げられてきた他者との関係は、夫婦関係 (e.g. Fowers, et al., 1996; Fowers, et al., 2001; Fowers, et al., 2002; Miller, et al., 2006; Luo & Snider, 2009)、友人関係 (e.g. Brendgen, et al., 2004; 外山, 2002)、恋人関係 (e.g. Swami, 2009; 外山, 2002, Barelds-Dijkstra, & Barelds, 2008; Conley, et al., 2009)、親子関係 (e.g. Cohen & Fowers, 2004; Mazur, 2006) など様々である。

3. 今後の課題

これまで、国内外の先行研究を概観してきた。本項では、問題点とそれを克服するための方法、さらに実際の研究例を示すことで、今後の課題を明らかにする。具体的には、まず階層データを用いたPI研究について述べる。ついで、質的研究法を採り入れたPI研究について述べる。最後に、縦断的研究について述べる。

A. 階層的データと階層的分析法

自己認知と精神的健康の関連に関する検討から始まったPI研究は、他者認知や関係認知など、関係の視点を取り入れ始めている段階にある。関係の文脈は個人の行動や発達に影響を及ぼしている(Reis, Collins, & Berscheid, 2000)ことから、PI研究に關係の視点を取り入れることは重要な意義を持つ。しかし、PI研究においてはこれまで、親子や夫婦、恋人や友人といった特定の二者関係に焦点を当て、恋人や配偶者を評定する、あるいはパートナーとの関係を評定するという段階に留まっており、關係の視点の取り入れ方には改善の余地がある。

PI研究に階層的分析法を用いることで、従来の方法では得られなかった、關係の視点を踏まえた重要な知見を得ることが出来る。個人に関する変数と集団に関する変数の両方が含まれるデータを階層的データと呼び、これらのデータを適切に扱うための統計的手法を階層的分析法という。階層的分析は、階層線形モデル(HLM: Hierarchical Linear Model)やペアワイズ相関分析(Pairwise Correlation Analysis)などがある。これらは階層的データを分析する方法という点で共通しているが、分析の視点が異なる点で区別する必要がある。が、本稿では、PI研究の一発展可能性の指摘を目的としているため、ここではまとめて論じることとする。したがって、実際にPI研究に階層的分析法を応用する場合には、どのようなデータを収集し、どのような視点から分析を行うのかという目的に照らし合わせて、適切な階層的分析の方法を選ぶことが必要である点に留意されたい。

さて、清水(2006)は、階層性のあるデータを分析する際には、階層的分析法を用いる必要があることを述べ、これらを使わない場合には、有意性検定の正確さを失い、得られる係数が希薄化されたものになる可能性を指摘している。また、階層的分析法を用いることの積極的な意義として、個人レベルとペア・集団レ

ベルを一つのモデルで同時に分析することによって、個人レベルの推定値のペア・集団間の分散を説明したり、ペア・集団レベルにおける関連を個人レベルの変数から推定したりすることが出来る(清水, 2006)。

具体的な応用例として、藪垣(2009)はペアワイズ相関分析の手法を用いて、夫婦関係認知と精神的健康の関連について検討を行った。夫婦関係は相互依存的な関係であると考えられるため、ペア内での類似性が予想される。すなわち、例えばある者が自身の夫婦関係に満足している時、その配偶者も夫婦関係に満足していることが予想される。このように、相互依存的なペアから収集したデータは、相関係数など、従来用いられてきた統計指標を考慮なしに算出することは出来ない。従来の分散分析や回帰分析といった統計手法を用いて階層的データを分析した場合には、1. サンプルの独立性の仮定に違反する、2. ペアや集団内で平均値を算出し、それをペア・集団レベルの変数とする、3. 個人レベルの変数間の関連を、ペアレベル・集団レベルの変数を無視して分析・解釈を行う、といった問題点が生起する(清水, 2006)ためである。藪垣(2009)はペアワイズ相関分析の手法を用いることで、これらの問題を回避した上で、夫婦関係認知が夫妻で類似すること、夫婦関係認知におけるPIが精神的健康と関連することなどを明らかにした。

今後、關係の視点を取り入れたPI研究が進められていく際には、階層的データを収集し、階層的分析法を用いて適切に分析することで、従来の統計手法を用いることでは得られなかったような新しい知見を得ることが期待される。

B. 測定方法

上述のように、PIの測定は、ある認知の変数に焦点を当てて測定を行い、理論的平均・他者評定・客観的指標のいずれかと比較することによって行われてきた。近年、これらの測定方法に加えて、新たな測定方法が用いられている。

Fowers et al., (2001) は、ENRICH (Olson, 1999) の下位尺度である The Idealistic Distortion scale の尺度得点を用いて、直接的に認知の偏りを測定している。操作的基準と同様に、使用可能な尺度が限られるという難点は残されるものの、特定の尺度を用いることで直接的にPIの生起を測定するのは有効な方法である。

また、Miller, et al., (2006) は、理論から作成したモデルに潜在変数としてPIを組み込み、構造方程式

モデル (SEM; Structural Equation Modeling) を用いて検討する方法を採用している。ここでは「パートナーの好ましい行動、好ましくない行動、およびこれらの相互作用から予測される値と比較して、より好ましいものとしてパートナーを認知する程度」とPIを操作的に定義している。そして、パートナーの行動に対する評定は、パートナーの好ましい行動、好ましくない行動、およびこれらの相互作用から説明される部分と、PIから説明される部分から成るとするモデルを検討している。ここでのPIは潜在変数であるため、直接測定することは不可能であるが、PIを踏まえたモデルを検討出来る点で極めて重要な意義を有する。

このように、PIの測定方法を工夫することで、よりPIを幅広く捉え、理解を深めることが可能となるだろう。

C. 質的研究法

PI研究は、ほとんど量的研究法によって研究が進められてきた。これらの研究において関心を寄せられてきたのは、「PIを有することがどのような結果につながるか」ということである。一方で、PIの内実についてはあまり目が向けられてこなかった。したがって、PIの定義を上述のように「肯定的に偏った認知」とするならば、「何について」「どのように」偏った認知なのかということについて検討することが、今後の研究課題の一つとなる。

量的研究法を用いた先行研究の多くでは、「何について」のPIであるか、すなわち焦点を当てる変数については、理論的な背景をふまえて研究者によって選択されてきた。また、「どのように」という点については、十分に検討されていない。これらの点について、質的研究法を用いた研究が有用となる。

研究例として、Parke, Griffiths, & Parke (2007) は、87名のギャンブラーに対して半構造化面接を行い、ギャンブラーは9種類の「肯定的に偏った信念」を有していることを見出した。この研究は、楽観性およびPIがどのようなものであるか、すなわち「どのように」偏った認知なのかという点について明らかにしている。

量的研究と質的研究は相補的な関係にあり、いずれの知見も重要である。よって、これらの知見が相互補完的に統合されることが望まれる。

D. 縦断的研究

PI研究において、縦断的研究は取り入れ始められた段階にあるが、その数は充分ではない。縦断的研究は、PIが長期的にどのような意味を有するかを検討する上で、非常に重要な役割を果たしている。この点については、大きく2つの立場が存在している。一つ目の立場は、PIは適応につながるという考え方である。PIは目的一達成志向や感情的well-beingを促進するため、精神的健康および適応に役立つと考えられている (e.g. Taylor & Brown 1988)。一方で、もう一つの立場からは、PIは不適応につながる考えられている (e.g. Baumeister, Bushman, & Campell, 2000)。自身の社会的関係について極端に肯定的な評価を下すことは、他者から非現実的に高い期待を寄せられることにつながる。そして、その高い期待に応えられなかった時、2つのことが起こる。一つ目は、周囲からのネガティブなフィードバックを受け入れることで、抑うつ的な感情を有するというものである。もう一つは、周囲からのネガティブ・フィードバックを受け入れず、代わりにネガティブなフィードバックを与える者に対して敵対するというものである。いずれの場合も適応的とは言えず、PIは不適応につながるものである。

研究例として、Brendgen et al. (2004) は、仲間との関係についてのPIと適応の関連について検討した。その結果、1. 仲間との社会的関係におけるPIは仲間関係の適応につながることを示し、2. 自身の社会的コンピテンスおよび友人関係におけるPIは6か月後の抑うつ感情の低減と関連すること、3. 調査開始時点で高い攻撃性を有している子どものうち、極端に高く、もしくは極端に低く自身の社会的コンピテンスを評価する者は、6ヶ月後に攻撃性が増していることを示した。この研究は、PIを有することは、調査時点のみならず、時間的間隔を経た上でも適応・不適応のいずれとも関連すること、およびその関連の仕方はPIの程度に依存することを示唆している。

このように、PIと適応・不適応の関連を検討する際に、時間の視点は不可欠である。したがって、今後、縦断的な研究の蓄積が必要である。

E. まとめ

本稿の主な目的は、PI研究の展望を行うことと、展望を通じて今後の課題を明らかにすることだった。

認知と精神的健康の関連については、代表的な精神的健康観を示し、これらは研究の文脈によってそれぞれ

れ支持されていることが明らかとなった。

PI 研究の展望として、「肯定的に偏った認知」と広く定義することが提案された。ついで、代表的な PI の測定方法を示した。研究のテーマとしては、PI の生起に関する心理・発達の要因および文化・社会的要因に関するもの、精神的健康・適応および問題行動・不適応に関するもの、親密な他者との関係に関するものの 5 つにまとめられた。また、PI 研究における PI の生起する認知領域については、その焦点となる自己認知の領域を拡大していること、および関係の視点を取り入れつつあることが示された。

最後に、PI 研究の今後の課題として、4 つの課題が示された。量的研究法への示唆として、階層的分析法を用いることでさらなる知見を得られること、測定方法を工夫することで先行研究とは異なる観点から PI を捉えられることが論じられた。また、量的研究法と相補的な関係にある研究法として質的研究法について論じ、これら双方の知見を統合することが望まれる。さらに、PI と適応・不適応の関連を検討する際に、時間の視点を取り入れる必要性について論じた。今後、これらをふまえた PI 研究の蓄積が期待される。

引用文献

- Baumeister, R.F. (1989) The optimal margin of illusion. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 8, 176-189.
- Baumeister, R. F., Bushman, B. J., & Campbell, W. K. (2000). Self-esteem, narcissism, and aggression: Does violence result from low self-esteem or from threatened egotism? *Current Directions in Psychological Science*, 9, 26-29.
- Fowers, B. J., Lyons, E., Montel, K. M., & Shaked, N. (2001) Positive illusions about marriage among married and single individuals. *Journal of Family Psychology*, 15, 95-109.
- Jahoda, M. (1953) The meaning of psychological health. *Social Casework*, 34, 349.
- 工藤恵理子 (2004) 平均点以上効果が示すものは何か：評定対象の獲得容易性の効果 社会心理学研究, 19, 195-208.
- Miller, P. J. E., Niehuis, S., & Huston, T. L. (2006) Positive illusions in marital relationships: A 13-year longitudinal study. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 1579-1594.
- Parke, J., Griffiths, M. D., & Parke, A. (2007) Positive thinking among slot machine gamblers: A case of maladaptive coping? *International Journal of Mental Health Addiction*, 5, 39-52.
- Reis, H. T., Collins, W. A., & Berscheid, E. (2000) The relationship context of human behavior and development. *Psychological Bulletin*, 126, 844-872.
- 清水裕士 (2006) ペア・集団データにおける階層性の分析 対人社会心理学研究, 6, 89-99.
- Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988) Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
- 外山美樹 (2006) ポジティブ・イリュージョンの功罪 —小学生のストレス反応と攻撃行動の変化に着目して— 教育心理学研究, 54, 361-370.
- 外山美樹・桜井茂男 (2000) 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, 48, 454-461.
- 藪垣将 (2009) 中年期における夫婦関係認知と精神的健康の関連 —システム論的観点からの検討— 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース 修士論文 (未公開)

(指導教員 中釜洋子教授)